

宮大工西岡常一の遺言

山崎佑次



棟梁の死は、キザに言えば
美しいニッポンの死であった。

目次

プロローグ	9
薬師寺白鳳伽藍復興奉行所 一九九〇年五月～九月	15
法隆寺西里 一九九三年十一月	43
棲蘭山への道 一九九〇年十二月	71
法隆寺西里 一九九三年十一月	87
薬師寺への道 一九七〇年五月	111
薬師寺伽藍 一九九一年四月～七月	127
木工作业所 一九九〇年十月～十一月	163
法隆寺西里 一九九三年十二月	177
木工作业所 一九九一年九月	195
回廊組み上げ現場 一九九一年十一月～一九九二年五月	209
法隆寺西里 一九九四年一月	225
エピソード	239
あとがき	250

一九九五年四月、桜の季節は去ったのに、雪を戴いた中央アルプスの山々が白く輝き、飛騨高山に肌寒い風が吹き抜けていた。西岡常一棟梁の訃報を受け取ったのはテレビ取材が明日で終わるといふ日の夕刻だった。葬儀は翌日だという。「どうしますか?」。電話の妻の聲が震えていた。夜中に車を飛ばせば間に合う。しかしその取材には東京からデザイナー・榮久庵憲司先生を呼んでいた。スケジュールを無理して来ていただいたのに延期することはできない。葬儀に間に合っても撮影に遅れてしまう。参列を断念せざるをえなかった。その夜、山犬がびょうびょうと遠吠えするように烈風が止むことなく吹きつづけ、カリカリとホテルのガラス窓をさしませた。なぜ参列しない? なぜ不義理するのか? わが心に差し込むように責め立てていた。あの日から十年以上の年月がたつ。

人生の途上、敬慕する先達とめぐり合い、身近に接することほどの至福はない。「法隆寺の鬼・西岡常一」は若いころからの憧れであった。信念を貫く大工。私心なく一途に寺に仕える。千年の建物を構築する——噂のどれもが心を揺さぶった。

大阪で小さな映像制作会社を立ち上げたとき、必ずこの人をドキュメントするのだと心に誓った。四十五歳のときだ。棟梁の本を買い込み、図書館で難解な建築書と格闘し、東京でおこなわれていた木造建築セミナーに通いながら社寺建築の基礎を学んだ。法隆寺では『木に学べ』（小学館）を手にし、どこが、どのように修復されたのかを確認し、仕事の跡をたどりながら想定シナリオを書きはじめた。まだ見ぬ人に会ってもらえるかどうかわからない。たとえ会うことができても申し出を断られるかもしれない。しかしそれが最低限の礼儀だと考え、自分なりの準備をしておきたかった。惚れた男はんに身をまかせ生娘のようにひたむきだった。

六年たって夢がかなう日がやってきた。

法隆寺の鬼は舞台を薬師寺に移し、白鳳伽藍復興というプロジェクトに取り組んでおられた。岩波映画の高村武次社長とはじめてご自宅に挨拶に伺ったとき、玄関脇の応接間に通され、ひどく場違いなところに来たという印象をもった。綿が飛び出しそうな古いソファ、ガタのきたテーブル、薬師寺を写した黄ばんだ観光ポスター、土産物らしき竹の民芸品、二スのはげた窓枠、奥の台所からかすかに豆腐と魚の煮付けの匂いがただよう。玄関の襦はうすよごれ、座敷の壁は紙を塗り込んだ下地にキラキラの金粉が散らしてある。質素すぎる。

華やがない。老臭が沈殿している。飼い犬は主人が老衰すると同じように弱る。そんな不謹慎な連想さえ浮かんだ。恋い焦がれた男はんの住まいやない……。

やがてその人が現れた。「お待たせしましたな」。想像していたよりずっと小柄な人だった。寝巻きの上にガウン。無精ひげが伸びていた。寸前まで臥せっておられたらしい。「読ませてもらいましたで」。薬師寺を通してお渡ししておいた想定シナリオのことらしい。「よう勉強しはった」。冷や汗が出た。「ありがとうございます」と言う余裕がなかった。五十一歳が八十一歳に吞まれている。やがて包み込むような視線をわたしに向けた。眼の奥に透徹したものがあつた。なにか気の利いたことを言わねばならないと思つたが、射すくめられたように硬直してしまつた。「わたしはテレビが嫌いですねん」。意表を突かれた。「一週間ほど撮影に来て白鳳の美とか斑鳩いかるがの匠とか言われてもな」。テレビではありませんと遮りたかつたが言葉にならない。「けどテレビでこんなに準備してくる人はいませんでしたな」。跳び上がりたいたいほどうれしかつた。「寺にはわたしから言うときますさかい。けどすこし待つてもらわんならん。体調が戻るまでな」。凝視はまだつづいていた。

映像作品『宮大工 西岡常一の仕事』『西岡常一 社寺建築講座』の取材で薬師寺とご自宅に通い詰めることになつた。『宮大工 西岡常一の仕事』は、薬師寺復興の過程を追いながら木の文化の真髄に迫ろうとしたものだが、発売後、多くの大工さんから「もっと生の棟梁の声を聞かせろ」「陣頭指揮をとっている棟梁の現場でのアドバイスを見たい」「木造建築のバイブルを期待する」等々の声が寄せられた。そんな要望に応えようと『西岡常一 社寺建築講座』の撮影に入ったが、すでに八十四歳を迎えていた棟梁の健康状態が思わしくなく、中断しては再開また中断というペースがつづき、何度も制作中止を申し出ようと考へた。しかし一年近く闘病生活をされたのち、渾身の力を振り絞って再びカメラの前に立ち、木工技法や設計思想のみならず、仕事への心構え、木造建築への思いをじゅんじゅんと囁んで含めるように話されたのを聞き、「ああこの人は次の世代に大切なことを申し送っているのだ、この仕事は西岡常一の遺言状なのだ」と身の引き締まる思いがしたのを昨日のことのように思い出す。しかしそれは危険な綱渡りでもあつた。一作目のときは撮影に入るまでに半年以上待たされ、二作目は一年近い長期入院を終えるのを待った。「必ず戻りますんで」。その言葉を信じて待つのはつらかつたが、それ以上に棟梁はしんどかつたはずだ。しかしその人は復帰した。

約束を守る。信に対する義である。日本人が失ってしまったものを大切にしておられた。そのことがとても新鮮だった。戦後社会が失った（あるいは必要としなくなった）美德をこの人は生きつづけている……。

昭和初期そのままに時間が止まった家……。畳に家族の足裏の脂が沁みつき、縁の下から鼯いぢの巢ねが臭い、天井裏からは蛇の脱け殻のすえた臭いがただよい、それらが混ざり合い、歴史となつて沈殿したその家こそ、いまにして思えば、自分を飾ることも家を立派に見せることもしない、余分なものをすべてそぎ落とし、捨て身で仕事に立ち向かった鬼の棲家すまかなのであった。その家を質素すぎると感じたのはこちらの未熟ゆえで、天下の棟梁にふさわしい豪華な家具を置くことも、威厳あるしつらえをすることも拒否する男の生き様だったのだ。

薬師寺伽藍復興委員会の太田博太郎おわたひろたろう座長は現役を退かれ、高田好胤たかだこういん管長は鬼籍に入られた。共同プロデューサーだった高村武次氏もいまは亡い。多くの人に助けられ完成した映像作品だったが、あらためて「ありがとうございます」と言うためにも、西岡学校の生徒たちが手の道具を使って木を刻んだように、文字という不慣れな道具で明治の男の不羈ふきなる魂を彫塑してゆくつもりである。

午前九時、大工さんの迎えの車が到着する。棟梁の出勤である。伽藍復興奉行所は寺域のいずれに木工作业所、用材置き場とともに建てられている。現場事務所の一階（原寸場）に二畳敷きの棟梁専用の着替え室があり、そこでベレー帽と古めかしい背広を脱ぎ、作業衣に着替え、鉢巻を巻く。眼鏡の奥が光り、慈顔の老人が威厳に満ちた建築家になる。八十二歳。やや腰をかがめ二階への階段を上る。プレハブの仮設小屋がぎしぎしときしむ。そこに建設会社の事務所と棟梁の部屋があり、石川所長が「おはようございます」と出迎える。よっこらしよとデスクにつくと、すかさずまかないのおばさんが腰を低くしてお茶を差し出す。飲み終わったところを見計らって所長が工程表や図面を示しながら問題点を報告する。こうして棟梁の一日がはじまる。

わたしたち撮影スタッフが現場に出入りすることを許されたのは、工事がはじまっておよそ二十年、大工さんたちが回廊第一期工事の木拵え（刻みともいう）に汗を流す、ゴールデンウィーク後の風薫る日だった。体調の回復を待つて欲しいと言われ、最初の打ち合わせから半年以上経過していた。

工事がはじまるまでの寺は、江戸時代に大改修がほどこされた金堂が仮堂として残され、

焼け落ちた西塔の跡は史跡として保存され、中門も回廊もなく、ただっ広い境内に白鳳様式を残す東塔がたずむ寂しい寺であった。薬師寺伽藍復興工事はそんな荒れ寺を創建当時の白鳳様式の姿に復元しようという一大プロジェクトで、金堂（一九七六年）、西塔（一九八一年）、中門（一九八四年）がすでに復元され、新たに玄奘三蔵院が建立されようとしていた。

中門（仁王門）から境内に入ると、まず金堂の屋根に目をうばわれる。白日の夢幻といふべきか、天から降りそそぐ光の粒が瓦に反射しおほろに輝くさまは、数万匹の蝶が翅を震わせて鱗粉を霧散させ、この世が楽土であることを祝福しているかのようなのである。建物全体は華奢でありながら堂々としている。ゆるやかな屋根勾配、ゆったりと反り上がる軒の曲線、いままさにはばたこうとする鴟尾（古代寺院の大棟の両端に載る飾り物）、グレゴリア聖歌が聞こえてきても不思議ではない。扉から垣間見える本尊の薬師三尊像が神々しい。まことに白鳳の美の極致といふべきであろう。人間社会の憎しみや怒りや哀しみを溶かす力をもつて迫ってくる。

そして圧巻なのが千二百年以上そこに立ちつづける東塔だ。枯れ、縮み、傷み、骨のようになつた木の集積——五重塔のように見えるが、軒の出のすくない屋根は裳階（各重の屋



1976年に復元された薬師寺金堂



金堂の鴟尾

金堂の復元が終わって次に西塔にかかろうというときに、あらためて東塔を実測調査して規矩・木割（設計上の部材の割り振りや寸法）を考え直すということになったんです。東塔しか白鳳の建物は残っておりませんでしたのでな。その結果、創建当時の姿を残してはいるものの、なにせ千二百年以上前の建物ですわ、風雪でねじれ、歪み、傷みがきており、時代時代で細かな修理がなされておった。軒の出や反りなんかの修理はおいといて、初重（三重塔の最下部）の柱が切られてあった。基壇が不同沈下したためレベルの低いところに合わせて高いところの柱を五寸ぐらい切っ

根と屋根のあいだに取り付けられた庇。揺れを押しさえる構造材として機能する」という庇で、正しくは三重塔である。いずれ中門の左右に回廊が取り付くが、そこはシートで覆われ、まるで工事現場の雰囲気となっている。

現場事務所二階から南を眺めると、甍の向こうに金堂の屋根とその左右に塔の上部が見える。古色蒼然たる東塔と復元されたきらびやかな朱塗りの西塔である。遠くから望むと東塔よりわずかに西塔が高い。なぜなのか。取材一日目、その疑問を問うことからはじまった。やっこの日が来た。憧れの人が目の前にいる。緊張のあまり喉がカラカラに渴いていた。

てるんですな。そこで西塔は五寸ほど高くしてあります。二重、三重もすこしずつ現在よりも延ばしてあります。基壇も歴史の重みで下がってますので元に戻しております。それと薬師寺はね、西から東に地形がゆっくり下がってますねん、一尺ちよつと。まあその地表高も考慮しますと、そうやな全体で六尺近く高くなってますわ。けれどもいづれ落ち着く。五百年もしたら同じ高さに落ち着くのところがいますやろか。

薬師寺伽藍を復興する。それはとりもなおさず、東塔が千二百年そこに存在しつづけたように、千年のいのある堂塔を再建するということである。五百年もしたら落ち着く……。スクラップアンドビルドが建築界の常識であるとき、永劫ともいえる建物をこの世に現出させる、その工事統括者は西岡常一にしおかつねかずをおいてほかになかった。

いまや社寺建築でさえ鉄とコンクリートで造られる時代である。材料の良質な檜ひのきを国内で調達することができなくなったからだが、同時に形さえ堂や宮であればそれでよしとする風潮がある。日本は古来より木の文化の国であった。照葉樹林帯に位置する日本列島は雨が多く多様な植物相を育ててきた。国土の六十五パーセントが豊かな森に覆われ、その伐採と植

樹のサイクルが建築、美術工芸、仏像、家具工芸などを支えてきた。森は持続可能な天然資源であった。そんな連鎖がとだえようとするとき、古代技法を伝承する意味において、後継者を育てる意味において、今後五百年はありえないといわれるほど大規模なこの木造工事のもつ意味は計りしれなく大きい。

千年の檜ひのきには千年のいのちがあります。建てるからには建物のいのちを第一に考えねばならんわけです。風雪に耐えて立つ——それが建築本来の姿やないですか。木は大自然が育てたいのちです。千年も千五百年も山で生きつづけてきた。そのいのちを建物に生かす。それがわたしら宮大工の務めです。そやなかつたら木に申し訳が立たんのとちがいますか。まして国の予算を使って建てる天下普請やなしに、百万巻写経、いうなら貧者の一灯で建てさせてもらっているわけですから。

人間のいのちなんてはかないもんやと思いますよ。けれど木はえらいですがな。東塔はね、千二百年以上も生き永ながらえているんです。それもよれよれの情けない姿やない、美しいこれ以上ない見事な姿ですつくと立ってるんでせ。

東西二つの塔が並び立つ日本最初の双塔式伽藍薬師寺は、六八〇年、天武天皇の九年に発願され藤原京に創建された寺だが、平城京の建設にともない、大官大寺（大安寺）、飛鳥寺（元興寺）とともに、現在の地に移された。平城京には興福寺、東大寺、西大寺などが次々と建てられ、再建された法隆寺を含め南都七大寺とよばれる仏教都市が形成された。これらの寺院から南都六宗といわれる三論宗、華嚴宗、律宗、法相宗などが育っていくこととなる。

本薬師寺から移築されたかどうか学会でやかましいですな。どっちともはっきり言えませんけれど、これだけの材料が急にここで準備されたとは思えません。おそらくわたしは、材料の量の点から移築ではないかと思っておりますが、ある部分はここで付け加えられたものがあると思います。移築の痕跡？ いやあ見つかってませんが、けれども材料や木割きわりがふぞろいなんです。ふつうはそういうことはしません。ということはここで新たに準備されたんやなしに、大部分の材料を（本薬師寺から）もってきたと考えたほうが納得できるんじゃないでしょうか。

中央に金堂が、その南に東西両塔が並び立ち、回廊で囲まれた華麗な伽藍は、度重なる火災や地震で崩壊し、創建当時の白鳳様式を残す建物は東塔ひとつという状態であった。本尊の薬師三尊をまつる金堂は炎上や倒壊をくり返し、一六〇〇（慶長五）年に大改修された仮堂として残されたまま。とくに明治の廃仏毀釈により寺は疲弊し、寺宝の經典まで手放すほど困窮をさわめた。

薬師寺伽藍とりわけ金堂を復興することは歴代管長の悲願であった。橋本凝胤はしもとぎょういん長老のたつての願いを受け継ぎ、四十三歳の若さで管長を受け継いだ高田好胤たかだこういん師は百万巻写経という遠大な計画に取り組んだ。発菩提心、莊嚴国土。国の文化財予算に頼るのではなく、善男善女から千円の写経料を募るといふ昭和の宗教運動として推し進められた。西岡棟梁はよく大工にこう言う。「おまえの一日の弁当を支払うために何人の人がお写経してくれはったか、そのとこをよう考えて仕事せなあかん」と。

いま玄奘三蔵院の建設に半分手とられてまっしやろ、残りの半分で回廊の木拵きこしらえです。まあ一年以上かかりますけど、これがおおまか終わるころ三蔵院も終わる。そして回廊の木組に全員でかかる。回廊が中門ちゅうもんとつながったら今度は講堂を解体再建して回廊とつなげます。そうしたら回廊に

囲まれた東塔、西塔、金堂、講堂という創建時代の白鳳伽藍の姿がよみがえることになる。そこま
で十数年、ほんとうならその後の食堂、十字廊までやりたいんですが、どうですか、そこまで
やろうと思うたらあと三十年はかかりまっしやろ。うーん、わたしはとても生きてられませんが
な。はっはっはっ。

法相宗大本山薬師寺。玄奘三蔵院は法相宗の始祖・玄奘三蔵（『西遊記』に登場する三蔵法師のモデル）の頂骨が薬師寺に迎えられたのを機に境内の北の端に建てられた。玄奘三蔵のインドへの求法の旅でもたらされた多くの経典が唐文化に大きな影響を与えたように、唐文化が奈良文化にもたらした影響は計りしれない。玄奘三蔵院が建立されたことで、始祖の教えを広める拠点が没後千四百年を経てシルクロードの東端に誕生したことになる。ひとりの人間の遺徳は歴史のなかで受け継がれる。勸進元の薬師寺だけでなく、お写経をした大衆も、釘を打つ大工も、寺に詣でる善男善女も、それぞれの行為をなすことで、はるか千年の時を超えて縁を結ぶのである。



玄奘三蔵院全景。創建当初はなかった伽藍



玄奘塔宝珠と「不東」という扁額